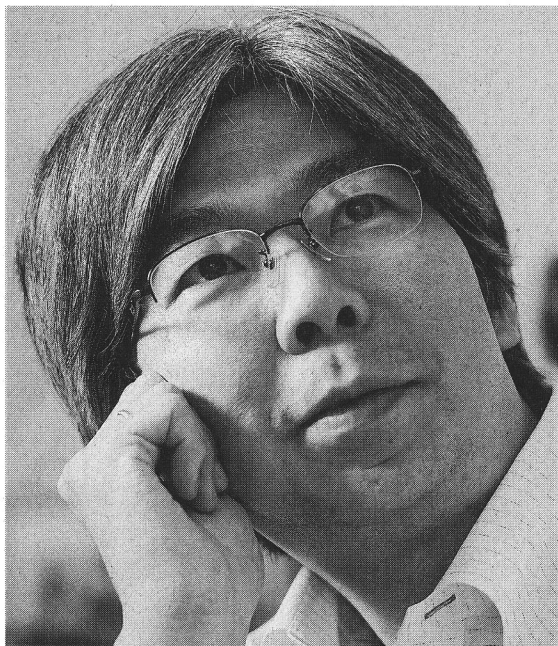


脳を育てる「紙の本」

辞書に始まった書籍の電子化が徐々に普及している。電子書籍は紙の本に代わりえるのだろうか。言語脳科学を研究し、脳のためには「紙の本」が必要と説く酒井邦嘉・東大教授に聞いた。(聞き手・文化部 鈴木美潮)



酒井邦嘉・東大教授に聞く

さかい・くによし 1964年、東京都生まれ。東大大学院総合文化研究科教授。専門は言語脳科学、脳機能イメージング。近著に「脳を創る読書」(実業之日本社)。

——本を読む時、脳はどう働いているのでしょうか。
「活字は視覚的な刺激として、脳の視覚野に入ります。脳内で音声化され、記憶と照合して単語や文法要素が検索され、さらに言語野に送られて『読む』ことになります」
——紙の本と電子書籍では、働きは違いますか。
「研究はないですが、大差はないでしょう」
——では、紙の本が必要とされているのはなぜですか。
「脳を創ることに関係するからです。活字を読む時には、音声を聞いたり映像を見たりする時と比べて、書いた人が何を言おうとしているかを想

電子書籍 目的で使い分け

像力で補っています。それによつて脳が創られます。さらに、理解するだけでなく思想を形成し、自分の考えをまとめていくことが、『脳を創る』ということなのです」
——電子書籍でも同じではないのですか。
「手がかりが豊富な紙の本は、自分の考えを脳でまとめていくのを助けます。また、紙の本なら、ハードカバーの学術書と実用書は見ただけで違うことがわかるのに、電子書籍やネットではどんな格調高い文章もそうでないものも、同じように画面に出てしまいます。そうすると、情報の価値や我々の受容の仕方にミスマッチが生じます。インクや装丁で五感に訴えてくる紙の本での読書の楽しみを味わうこともできません」
——電子書籍やネットで得た知識は記憶に残らない気も

します。
「画面上の文字はスクロールすることで位置が変わりますが、印字された文字の位置は紙に対して変わりません。本の厚みが与えるページの量的な感覚も電子書籍では希薄です。我々の脳は、実はそうした位置や厚さなどの情報を無意識に取り込んで記憶しています。手がかりが希薄になると、忘れやすくなったり、ミスをみつけにくくなったりするでしょう。誤字脱字も、パソコンで推敲している時には気付かなくても、プリントアウトすると気付くものです。紙に印刷されたものには手がかりも、手がかりを探す時間

的余裕も豊富にあるのです」
——教育現場への電子教科書の導入の是非も検討されています。
「子どもの記憶力は柔軟で、たくさんのが吸収できます。その時期には、情報をある程度制限して理解を促し、自分のものにさせる教育が重要です。教科書からインターネットにリンクして膨大な情報にアクセスするというのは逆効果でしょう。教科書に書き込んだり、ノートに書き写したりする作業を通じて、考え、覚えていくのです。便利な機械が出来たからといって、ぱっと見ただけで覚えられるわけではありません。情

報を得ること『わかる』ことは全く違います。『知っている』というところ、説明できることは違うのです」
「多くの人は易きに流れるので、考える前に調べれば、頭を使わないで済むという傾向になってしまふ恐れがあります。そうなったら、教育は崩壊することでしょう。この傾向が進めば、他人を思いやる想像力すらなく自己主張ばかりする人間の社会になってしまふかもしれません」
——ではどう使い分けていけばいいのでしょうか。
「思考のツールとしての紙の本を絶やしてはいけません。一方、情報を収集したい

とか、膨大な情報の中から検索するといった場合には電子書籍が有効でしょう。紙の本と電子書籍の関係は、レコードとCD、ビデオとDVDのようなメディアの新旧交代とは本質的に違います。自転車と自動車、あるいはシェフのいる料理店とファミリールーベキものですよ」
「文明の岐路では、立ち止まって考えることが必要です。電子書籍が出現したのは、人間らしさを見失わないためのチャンスです。何が本当に機械化に欠けていたか、人間が譲れないものは何かを考えることが必要なのです」